

## ヨハネによる手紙第一 2章28-29節 「御前に確信ある信仰」

### 1A キリストの現れ 28

1B キリストに留まる者

2B 確信

3B 恥じ入らない者

### 2A 義を行う者 29

1B 神の正しさ

2B 神から生まれた者

## 本文

ヨハネの手紙第一 2章を開いてください、28-29節を見ます。「<sup>28</sup> さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。<sup>29</sup> あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら、義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはずです。」

今晚の学びは、「御前で確信を持つ」という題名にしています。キリストの御前に出ても、恥ずかしくない、そのまま自由に主の前に近づく恵みについて見ていきたいと思えます。

ヨハネは、2章 27節まで書いて、一息ついている感じです。「さあ、子どもたち」と言い換えていますね。前回の学びで、「<sup>26</sup> 私はあなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書いてきました。」と言って、反キリストの現れについてずっと話していました。けれども、御子のうちに留まりなさい。御子によって注がれた油があるので、この方が真理について、すべてを教えると、ヨハネは励ましていました。うちに住まわれる聖霊が、御子に留まっている者たちに与えられています。

そして、「さあ、子どもたち」と使徒ヨハネは呼びかけています。神によって生まれた子どもたちということであり、長老であるヨハネは、神のその愛をもって彼らを愛しており、それで、「子どもたち」と呼んでいます。これまでも、「子どもたち」と呼んで、神のうちにいる彼らを励ましていました。「2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。」「2:12 子どもたち。私があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。」罪を犯さないようにするという、霊的な成長を呼びかけていますが、たとえ罪を犯していてもイエス様は執り成しておられる。また、あなたがたの罪は赦されたのですよ、と励ましていましたね。

## 1A キリストの現れ 28

28 節からの呼びかけも励まします。「**キリストのうちにとどまりなさい。**」と励ましています。24 節から、ヨハネは何度となく、「とどまりなさい」と命じていましたね。「2:24b もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。」「2:27b あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。」27 節では、御子のうちに留まりなさいと言って、28 節では「キリスト」のうちに留まりなさいと言っているのは、前者、御子は、御父との関係の中で話しているからです。イエス様と父は一つだから、御子を告白していれば、父なる神を知っており、この方の中にいるということです。

ここ、28 節でキリストのうちに留まりなさいと言っているのは、次に出て来る、キリストの来臨について述べるからです。旧約聖書にある約束は、油注がれた方、メシアが来られて、一切のことを知らせ、万物を回復される方として明らかにされています。

## 1B キリストに留まる者

「とどまる」という大切な言葉を何度も使っているのが、ヨハネの特徴です。コロサイ人への手紙 1 章には、「1:27 この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」とパウロが言っています。天地万物を造られた神がおられて、その方の中に生きるように、キリストがしてくださったということです。エデンの園で神と一つになっていた人がその罪によって引き離されて、それから神が人に近づいて、幕屋や神殿によって彼らの中に住むようにされましたが、しかし、今や、キリストの十字架によって、完全に神と和解し、その流された血によって、私たちの罪が取り除かれて、それで再び神が私たちの内に住んでくださるようになりました。そして、御霊が内に与えられたので、御父と御子が私たちの内に留まっておられるようになったのです。イエス様が、こう言われたとおりです。「ヨハ 14:20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」

そして、キリストの内に留まっていることによって、神が行われるのは、第一に、実を結ぶことです。「ヨハ 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」留まるという特別な関係によって、私たちの生活から、神に対する実を結ばせることになります。これまでは、自分の内から振り絞って、良い行いを生み出そうとしていたところが、そうではなく、キリストに留まることによって、キリストが予め用意された良い行いを行うようになるのです。

また、キリストの内に留まることによって、何ら妨げられることのない祈りの生活も約束されています。「ヨハ 15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」何でも求めれば、それがかなえられる、という、すごい約束があります。イエス様の祈りが御父に対して、何ら妨げられる

ことなく聞かれていたように、今や、同じ恵みが私たちにも与えられています。

## 2B 確信

キリストの内に留まっていれば、約束があります。「**そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ**」ということです。「**現れる**」というのは、これまで隠されていた神の栄光をもって現れること、具体的にはキリストが再び来られる時のことです。ペテロが、イエス様がへりくだった人の姿から、神の栄光の輝きに変えられたのを目撃しましたね(Ⅱペテ 1:16-18)。そのようにして、キリストを信じている者たちのために現れる時が来るのだ、ということです。

使徒たちは、何度となく、キリストが再び私たちのために現れてくださることを力説しています。「ヘブ 9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。」私たちは、既に救われていますが、その救いの完成が二度目に来られる時に与えられるということです。「ピリ 3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」救いの完成とは、今の卑しいからだを、キリストの栄光に輝くからだと同じにしてください、ということです。ところで、私たちはしばしば、「私たちの国籍は天にあります」ということばを、キリスト者の墓標として読みますね。けれども、死後の復活もそうなのですが、文脈では今、生きている時に、主が戻って来られて、自分の体を変えてくださるといふ文脈の中で、国籍が天にあると言っています。

そして、今晚の学びにおいて、鍵になる言葉は「**確信**」です。このギリシア語「パレーシア παρησία」は、「言論の自由」を表していました。つまり、どんな考えに基づき発言し、表現しても、そのことによって社会的な制裁や、国家権力による弾圧を恐れることなく、全く自由に語れるという意味です。聖書では、「妨げられることなく」とか、「大胆」という意味合いで使われています。つまり、そのまま主の栄光の姿に近づくことができ、そこで裁かれることも、恥を見ることも、締め出されることもなく、そのまま御子の前に隔たりなく近づけるということです。

これは、どれほど優れたことか知れません。聖なる神であられる主に大胆になれるのですから。エデンの園で主が歩いておられた時に、罪を犯した後のアダムとエバが隠れましたが、すでにそこには、ここでいう確信がなくなってしまったからです。それから、罪のいけにえを通して神に近づくことができるようになりましたが、幕屋においては、至聖所で大祭司が年に一度、いけにえの血を携えることによって、ようやく主のご臨在に入ることが出来ました。けれども、その栄光の姿に会う時に、自分は全く聖なる者にされて、何ら妨げられることなく、その栄光をまみえることができるようになったのです。

パウロは、これは信仰の義によって与えられたことをローマ 5 章 2 節で述べています。「このキリ

ストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを望んでいます。」ここの「導き入れられました」と言う言葉は、「神のところに近づくことができます」とも訳せます。つまり、大祭司のように、神のところに近づくことができるようになった、その栄光にあずかる望みがある。」と言っているのです。黙示録の最後、天のエルサレムにおいては、22章3-4節には、「…神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」とあります。モーセが、栄光を見せてくださいと願ったものの、御顔を見ることが出来ず、その後ろ姿だけを見たのに、それ以上に御顔を仰ぎ見るようになるのです。

ヨハネは、御前に確信を持つことができることについて、第一の手紙で他の箇所でも話しています。「3:19-21 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。20 たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。21 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」兄弟を真実を行いをもって愛している時に、神の御前に出ても、安らかでいられると言っています。この安らかでいる、ということが、確信を持っていることの表れです。心が責めるというのは、十分に兄弟を愛する戒めを守られていないという良心の痛みです。けれども、その心以上に神は大らかな方ですから、必ずや御前に立つことができます。けれども、今、兄弟を愛しているならば、今、この時にキリストが現れても、何ら妨げられることなく、主の前に立つことができるということです。

そして、4章17節でもこう語っています。「こうして、愛が私たちにあって全うされました。ですから、私たちはさばきの日に確信を持つことができます。この世において、私たちがキリストと同じようであるからです。」

主の前に立つことができない、つまり確信とは裏腹の状況とはどういうことかを、見てみたいと思います。黙示録6章で、地上に神の災いが降り注ぎ始める姿が出ています。神の患難、神の御怒りが地上に下る時です。第六の封印が解かれた後に、地上の人々がこう叫んでいます。「6:16b-17 そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。17 神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」子羊の御怒りの前に立つことはできない、と、うめいています。

### 3B 恥じ入らない者

そして、ヨハネは「**来臨のときに御前で恥じることはありません。**」と言っています。恥じる、とはどういうことでしょうか？これは、先にも言及したアダムとエバのことから始まります。彼らが神に造られた時に、「創 2:25b ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。」という状態であったのに、罪を犯した後に、裸であることを知って、いちじくの葉をつづり合わせて、腰を覆うも、主が園の中を歩いたら、「3:8 神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」とあります。

恥が入ったのです。神の前で、罪と汚れのある自分が明らかにされる時に恥を受けます。

主のおられるところで恥を受ける人の喩えを、イエス様がお語りになりました。王子の祝宴への招きの喩えの中に、披露宴の中に礼服を着ていない人が一人いました。王がその人に、「友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。」と尋ねても、彼は黙っていました。それで王は召使いたちに、「この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。その男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる。」と言いました(マタイ 22:10-13)。礼服は、イエス・キリストご自身とその義を身に着けることです。「主イエス・キリストを着なさい。(ローマ 13:14)」とパウロが言いました。

主の前では、裸のようにされることをヘブル書は告げています。「4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」主が来られた時に、何の用意もない者のことを、裸で歩き回っているとイエス様は言われています。「黙 16:15 見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである」ですから、キリストの内に留まっていることがいかに大切かを教えています。

それで、使徒たちは、主イエスが来られる時に、恥じ入るところのないように祈っています。ピリピ人に対しては、パウロがこう祈りました。「ピリ 1:9-11 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、10 あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。」純真で非難されるところのない者となり、また、イエス・キリストからの義の実に満たされるように、と祈っていますね。そして、問題の多い、コリントの人たちに対しても、同じ望みをパウロは持っていました「I コリ 1:7-8 その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることがなく、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望むようになっていきます。8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます。」主ご自身が、彼らを堅く保って、主の来臨の時に責められるところのない者としてくださるという、神の約束です。

そして、責められるところのない状態というのは、祈りであり、また神の約束です。テサロニケ第一 5章 23-24節では、このことを二つパウロが語っています。「23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。24 あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」完全に聖なる者になるという、すごい祈りです。霊、魂、体のすべてが、責められるところのない者として保たれるように、と祈っています。けれども、神は真実なので、そのようにして下さる、と約束しておられます。天路歷程を思い出します。天のエルサレムまでの旅路は、神に約束されています。けれども、

そこにはつまずきの石もあり、試練や誘惑、疑いもあります。ですから、約束はされているのですが、祈りでもあるのです。

ところで、恥と言えば、パウロは、「私は福音を恥としない」と言いました。「ローマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」ここでの恥というのは、福音が何か悪いものであるかのような、ためらいを感じる。何か言われるのではないか、反対されたり、迫害されたりするのではないか？そういった恐れから、黙ってしまうのが、福音を恥とするということです。けれども、その逆にしたらどうでしょうか？神の前に私たちが連れて行かれる時に、イエス様が、私たちが神の前に連れて行くのは恥だと感じたら？恐れて、この人は神の前に連れて行くことはできないとして、控えたらどうでしょうか？そうではなく、イエス様は堂々と、「これは、わたしのものです。」と宣言してくださることを願いますよね。であれば、私たちがイエス様を大胆に宣べ伝え、この方の名を恥としないことが必要なのです。

## 2A 義を行う者 29

そして29節から、新たな話題に入ります。「神に生まれた者」という言葉です。「**29あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら、義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはずです。**」3章から、神から生まれることについてヨハネはじっくりと話していきます。この節は、28節からの続きです。キリストが現れた時に、恥じることがないというのは、イエス様からの義の実に満たされているということを、ピリピ1章でパウロが言っていました。義を行う者になっているということです。そうしたつながりで、正しさ、義についてヨハネは今、語っています。

### 1B 神の正しさ

まず、「**あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら**」と言っています。当たり前のように聞こえるかもしれませんが、実は当たり前ではありません。正しいのは神のみであり、神が正しい方であると知っているのは、信仰者であるからです。多くの人は神が正しくないとしています。悪魔が蛇の形を取って、エバを惑わした時に、神が、善悪の知識の木から取って食べてはならないと言われたのは、利己的な理由で、自分と同じように賢くならないためだと悪意を持たせたのです。

神は正しく、キリストは正しい方です。この方に正義があり、私たち人間にはありません。多くの悲劇は、人間が自分たちの義を実現しようとしてきたことです。「ヤコブ 1:20 人の怒りは神の義を実現しないからです。」人間の義を実現しようとするときに、世界で最も悲劇的なことが起こりました。分かり易いのは、共産主義ですね。ナチスがユダヤ人を殺した人数よりも、はるかに多い人数を、正義の名の下で殺してきました。

正しい者は一人もいない、とすることを知ることが大切です。そしてキリストこそが正しい方なのです。「ヘブル 1:8-9 御子については、こう言われました。「神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。あなたは義を愛し、不法を憎む。それゆえ、神よ、あなたの神は、

喜びの油で、あなたに油を注がれた。あなたに並ぶだれよりも多く。」イザヤは預言しました、「32:1 見よ。一人の王が義によって治め、首長たちは公正によって支配する。」エレミヤは、こう預言しています。「エレ 23:5-6 見よ、その時代が来る。——【主】のことば——そのとき、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この地に公正と義を行う。6 彼の時代にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。『【主】は私たちの義』。それが、彼の呼ばれる名である。」主が、私たちの義です。

## 2B 神から生まれた者

そして神またキリストが正しい方であるので、「**義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはず**」と語っています。ここで興味深いのは、神から生まれると義を行うと、ヨハネは語っていないことです。「**義を行う者もみな神から生まれた**」と語っていますね。私たちははたかく、実体を見ずに、人の語っている言葉だけで信じてしまう傾向があります。人がいくら、神から生まれたと語っても、義を行っていないければ、それは偽りです。その語っていることよりも、行っているところに、確かに神によって生まれたかどうか、見えてくるのです。

生まれるというのには、二つの意味で使われています。一つは、性質を受け継いでいるということです。神から生まれたとは、新しく神のご性質にあずかったということです。「Ⅱペテ 1:3-4 私たちをご自身の栄光と栄誉によって召してくださった神を、私たちが知ったことにより、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔をもたらすすべてのものを、私たちに与えました。4 その栄光と栄誉を通して、尊く大いなる約束が私たちに与えられています。それは、その約束によってあなたがたが、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」ですから、新しいキリストの性質にあずかったのですから、DNA のようにして自分のうちにあるのですから、新しい歩みをして、義を行う者となるのです。

もう一つは、神に倣うということです。「エペソ 5:1 ですから、愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。」神から生まれているのですから、神が父です。子は父のしていることを真似します。神が正しければ、子も義を行っているのです。イエス様は敵を愛しなさいというところで、こう命じられました。「マタ 5:44-45 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」悪人にも神は恵みを与えられているのですから、悪を自分に行う者に対しても良くする、ということは、神を父としているから、この方に倣うということです。

以上ですが、私たちの力では決してできないことであることをもう一度、思い起こしましょう。むしろ、キリストに留まる、ということが私たちに与えられている命令です。その中で初めて、自分を捨て、自分の十字架を背負い、それで、キリストに倣うことができます。